

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	瓜田純久教授送別の辞
別タイトル	Farewell Address to Professor Yoshihisa Urita
作成者（著者）	佐々木,陽典
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(1). p.24 25.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023 061
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD59070312

瓜田純久教授送別の辞

佐々木陽典

東邦大学医学部総合診療・救急医学講座（大森）

今日、患者さんの診察を終えてお辞儀をしたところ、「医者からそんなに平身低頭でお辞儀をされたのは初めてです。」と驚かれました。「瓜田先生と同じようにしただけなのに…」と私も驚きました。

瓜田先生の行動は、常に「世間が見捨てる弱くてダメな人をこそ見捨てず、自分の元に来てくれたことに感謝する」という人との接し方、「働けることに感謝して、日々汗をかく」という仕事への姿勢、「自分がしていることは正しいのか常に問い続ける」という探究心と「それでも自分は無知であることを知りながら生きる」という徹底した謙虚さに基づいているように思います。ご退職に際して、*Nobles oblige* を体現しつつも「わいは適当だから」と照れ隠しをされる瓜田先生との思い出の一部をご紹介します。

研修医1年目の私が救急外来で当直していると、深夜にもかかわらず、最上席の当直医だった瓜田先生が点滴留置のために笑顔でいらした時の衝撃を今でも覚えております。「いい医者になりたい」という漠然とした思いだけで医師になり、臓器別に細分化された医療への違和感と患者の役に立てない自らの不甲斐なさにもがいていた私を、瓜田先生は（恐らくダメな奴だったからこそ）研修医の頃から可愛がって下さり、病院に限らず、居酒屋でも、多くの大切なことを教えて下さりました。

瓜田先生が本学第一内科で新進気鋭の内科医として臨床と研究に邁進されていた33歳の時に御父君が急逝され、先生はやむなく本学を辞して、青森のご実家の診療所を継承されました。中村光雄元弘前大学教授（消化吸収学会及び安定同位体・生体ガス医学応用学会理事長）から伺った「瓜田という医者が研究を指導してほしいと私の元に足繁く通って来るようになった頃、瓜田医院という診療所が大評判だと聞いたので、瓜田家には双子の兄弟がいて、兄は熱心な研究者で、弟は腕のいい開業医だと思っていた。それが双子ではなくて同一人物だと知って、仰天した。」という逸話が青森での瓜田先生の生き様を雄弁に物語っていると思います。

「羽田空港のベンチで数時間悩んだ」末に青森での輝かしい経歴を捨て47歳の時に本学総合診療・救急医学講座に助教としてお戻りになってからも、ご苦勞は絶えず、医局の存亡が危ぶまれることもありました。当時、沖縄で研修中だった私は、辛い研修から逃れたい下心もあり、医局に戻るべきか瓜田先生に相談しましたが、先生は「医局は私たち年寄りが守るから、思いっきり勉強してきなさい。」と言ってくれました。「戻ってきてほしい」という本心を押し殺しての激励であることが声色から伝わってきて、今でも耳に残っています。

私は論文を書かない不肖の弟子でした。卒後8年目に沖縄で「自分の手で世の中に伝えたい」テーマに出会い、やっと初めての論文執筆に挑戦しましたが、行き詰まっていました。その折、上京して瓜田先生にお会いする機会があり、先生がビールを飲みながら「わいは息子が英語で論文を書いてくれたら、思い残すことはないから死んでも構わない。」とお話されたのを伺って「俺もこの論文を世に出せれば死んでもいい！」と奮起して書き上げたことを覚えています。この経験を通じて、先生が常々仰っている「自分が本当に患者の役に立つことをしているのか問い続けるために研究し続ける」という意味が私にも少し理解できたように思います。

瓜田先生は常に笑顔で誰よりも働き、「上機嫌は上司の責務」という格言を体現されておられました。他人への底抜けのやさしさの陰で、常に自らを厳格に律されていたと拝察致しますが、いつも「わいは適当だから」と笑っておられました。

院長室に堆く積み上げられた付箋だらけの哲学書が物語るように、瓜田先生は、病院長として4年に亘ってコロナ禍で難局に陥った大森病院の舵取りをされながら、数学・物理・哲学・歴史への深い造詣に基づいて、ともすれば選別された患者への受動的労働となりがちな現代医療への問題提起も続けて下さったように思います。

瓜田純久という不世出の天才の後に残された私達は心細

い限りですが、先生が常々仰っていた『『大学だから…』』という言葉は診療の場で患者さんに投げかけるものではない。自らにこそ『『大学だから…』』と問いかけて研鑽しなくてはならない。『診療は General, 研究は Special』を目指して、患者さんを選ぶのではなく、患者さんに選ばれる医者になりなさい。』という言葉に胸に、医局員一同、患者さんへの感謝を忘れず、臨床・教育・研究に楽しみながら励

んでまいりたいと思います。

20年近くの永きに亘り、東邦大学総合診療・救急医学講座、そして大森病院を導いて下さり、本当にありがとうございました。退職後もぜひ頻繁に大学にお越しいただき、世界中を探しても先生からしか拝聴できない貴重な御講義をお願い申し上げます。